

原 著

漱石『夢十夜』考 I —「第一夜」の示唆するもの—

戸田 由美

<要 旨>

夢とは何であろうか。夢という手法を用いて『夢十夜』という物語形態に対する漱石の新しい試みがここに窺われる。この作品は、独特な意識の流れと無意識の層のはざまで<夢>という舞台のあやなす時間空間の幻想的世界を見事に完成させた。そしてそれは人間の心の、意識と無意識の二重構造が抱える、複雑さや多重性、仮面と性格という両義性を象徴しているものではないかと思う。そしてその世界は我々に何を提唱しようとしているのか。「第一夜」の示唆するものを論じてみようと思う。

キーワード：意識、無意識、夢、時間空間、第一夜

1. はじめに

ここに、明治36年11月27日に書かれた漱石の英詩がある。

I looked at her as she looked at me:
We looked and stood a moment,
Between Life and Dream.
We never met since:
Yet oft I stand
In the primrose path
Where Life meets Dream.
Oh that Life could
Melt into Dream,
Instead of Dream
Is constantly
Chased away by life !

November 27 1903^{註1)}

明治36年英国留学から帰国後漱石は切実な思いを自己の魂と重ねて、一篇の詩に表現する。ことばにならぬ言葉が夢に凝縮されるのであろうか。そして明治41年7月25日から8月5日迄10日間、作品『夢十夜』

左の英詩を桶谷秀昭氏^{註2)}は次の様に訳している。

私が彼女をみたとき彼女は私を見た
私たちは一瞬互いに相手を見、立ち止った
生と夢の境に。
私たちは以後二度と出会わなかった
しかし しばしば私は立つ
桜草の路に
生と夢とが出会う場所に。
ああ生が夢の中に融けこみ
夢がたえまなく
生に蝕まれるのでなければ!

は東京朝日新聞に連載される。ことさら関心をひく夢という手法。その方法手段をもってしてまで作家漱石は作品『夢十夜』で何を言わんとしたのか。また何を言わなければならなかったのか。彼にとっての<夢>

は何であったのだろうか。

『夢十夜』に関する解釈は多岐にわたるが、越智治雄氏^{註3)}の「現実の漱石のうちにあるもののデフォルメされたかたち」、佐々木充氏^{註4)}の「『夢十夜』は見えざる自我の内部を視んとする文学であり、その暗闇の底に「存在すること」の認識を得んと欲する文学である。」という見解がまず挙げられる。また内田道雄氏^{註5)}の「〈夢〉のスタイル自体が、漱石の強い造形的意志を示す」とか、あるいは岩上順一氏^{註6)}の「これは夢の記述という形式を借りてはいるが、そこには漱石の意識作用による加工と再構成が十分に加わった文学作品とみなす」という見解もある。あるいはまた、高橋たか子氏^{註7)}の「夢と小説とは全く同質なもの」という様な見解があるが、しかし本稿では、あくまでこの小説のステージが何故〈夢〉でなければならなかったのかということに的を絞って論じてゆく。作品に内在する計り知れない時間空間。そして〈夢〉というものの構造には、どのような線上の往還があるのだろうか。この〈夢〉という舞台で何が生まれ出づるのか。『夢十夜』の成立にかかわる夢の方法を解明するために、まず始めに夢の構造について考察したい。

2. 〈夢〉とはなにか 一夢の構造について

小説のステージが〈夢〉の中である以上、小説の構成要素としての「構造」を明確にする必要がある。最初に深層心理学の巨匠、フロイト、ユングの代表的見解に注目したい。

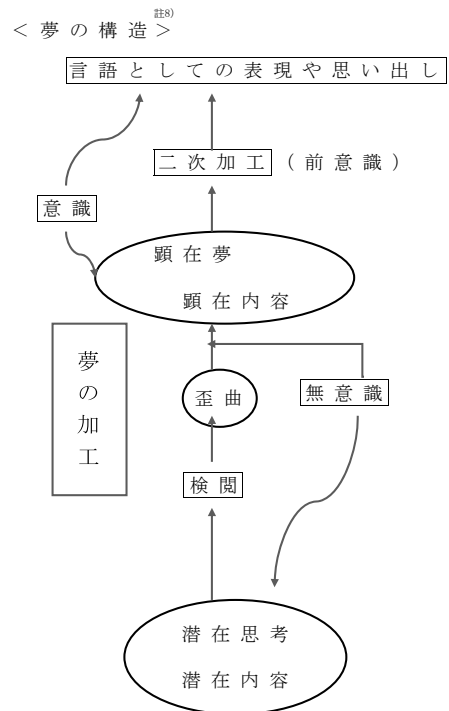
*フロイトの場合

夢の図式は右記のとおりであるが、いわゆる夢というのは、自我であり意識なのである。意識に入り込んで夢が出るまでには様々な夢の加工が始まる。つまり夢をみながらその夢の中に入れる様に自我意識が歪曲されていくという、ここに夢のむずかしさがある。夢は無意識の世界から表面にたちあられるものであるが、無意識の本質についてフロイトは、どこを中心概念にするかというむずかしさはあるにせよ、基本的には無意識は意識から抑圧されたものであること、その無意識の世界と密接にかかわるのが防衛機能だと表明した。

この防衛機能は無意識の力が意識の世界へ浸蝕することを抑えようとする機能である。また無意識の世界は意識の中心である自我の力が及ばないところにある。そしてこの一端というのは、例えば今まで夢をみ

ながら思うとおりに夢を見ることができなかつたのは、自分たちの意識というひとつのレベルの統合からはずされているということをも物語っているのである。そして我々は子どもの頃はその力（自我）がきわめて薄いものだからやりたい放題のことをやって様々な外圧にあい、そこで徐々にまるくなっていった現状生活に入って行く形になる。言い換えれば、無意識の力が強いものだからこれが毎日、生きているときに自分の願望欲求なるものが強くでてきたとき、通常我々は日常生活を送れなくなるということになる。だからそれを一しかし何か様々に外側の世界で色々な悩みがあれば、実はここの無意識の世界は非常に強く刺激され、そして何らかの形で外に出ようとする。無意識の世界が外へ出ると自分自身の自我というものの結合が保たなくなるのでそれを無意識的に押し込めようとする、という力が実はフロイトでいうところの防衛機能となる。しかし防衛機能も様々なパターン^{註9)}があるが一応、ここにすべて掲げてみる。（日常、使われている表現をなぞらえているため、中にはいささか無理な表現のあることをお断りしておく。）

- 1 抑圧（臭いものにはふた）
- 2 逃避（病気に逃げる）
- 3 退行（童心に戻る）
- 4 置き換え（他人に当たって鬱憤をはらす）



河合隼雄『ユング心理学入門』より

- 5 昇華（寛大な受け取り方で心が向上する）
- 6 反動形成（顔で笑って心でなく）
- 7 補償（江戸の敵を長崎で打つ）
- 8 男性的抗議（男勝りの女性）
- 9 取り入れ（憧れの人の真似をする）
- 10 同一化（母子は一体）
- 11 投射（疑心暗鬼）
- 12 合理化（引かれ者の小唄）
- 13 打消し（白紙に戻してやり直し）
- 14 隔離（見て見ぬ振り）

（※一番よく使われるのが抑圧という機能である。抑圧とは受け入れがたい行動や観念が無意識の中に押し込められること）

以上が防衛機能の最大の特長であるが、これらはどれひとつとっても我々にとっては耳の痛いことばかりである。一般論上からいえばあまり良いことではないが、もし様々な防衛機能をもっていなければ我々はおそらくそう長生きができないであろう。ないとすると本当に大変であろう。もっと言えば、心に多くの悩みを抱える人、また防衛機能が極めて薄い人は対人関係でトラブルをおこす、あるいは機能が強すぎれば神経症になる人、等々人間のきわめてむずかしいところである。だから言い換えれば、抑圧という人間のもっている防衛機能は一種の必要悪であり、本音とたてまえという独特の人間の知恵が出来上がるわけである。つまり、＜社会的基準の発生＞である。本音が抑圧されてゆくと自分のもっているエゴイズムなどを常に、＜はずしたい＞という欲求となってここにたまってゆくとフロイトは考えた。先に述べたように、通常の世界では悪といわれているものが抑圧されるので、その抑圧されたものはどこかに出口を求めると考えることは可能である。逆に言えば、＜人間の心＞は＜悪＞というものを＜願望充足＞して展開しようとするわけである。そしてその出口を求めて、あるときは神経症、あるいは失錯、そしてなおかつ＜夢＞というパターンによって展開されてゆく。あくまで無意識というのは通常は意識の充足感になければならないという発想であるから、それができないときに神経症などがおきるという考え方である。したがって最後、無意識の世界の夢は、意識で果たせなかったひとつの願望充足というものが基本的なフロイトの夢分析の立場になっていく大前提なのである。だから抑圧されたものが復元される時に夢があらわれ、それを意識的にどう自覚化されることによって自我が強化されるという立場なのである。だから自我意識を統合させることによって解

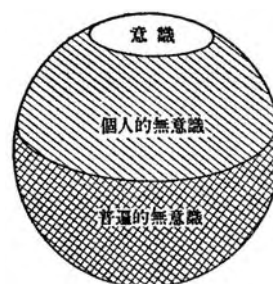
決すると考えたのである。

*ユングの場合

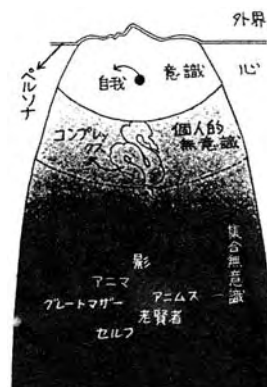
前述した様にフロイトの意識は意識から抑圧されたものが中心であったが、それをユング流に解釈するならば、個人的無意識に相当してゆく。ここで重要なことは、ユングの無意識がフロイトの無意識と異なる点は、無意識を＜個人的無意識＞と＜普遍的無意識＞に分けたところにあるのである。個人的無意識はその人固有の無意識であるが、普遍的無意識は、人類共通の無意識として深層の深い部分を形成する。

表象（表現）可能性の遺産として人類及び動物にさえ普遍的なもので、まさに「木の根っこ」にたとえることが出来よう。我々には実はそれは見えないもので、イメージしなければならない。それをまた普遍的意識と位置づけるわけである。ここがいわゆる、様々な宗教とか神話のビジョン化されてゆくひとつの「元型」であるとユングは考えていた。イメージの根源となるこれらの元型が意識にのぼるとき、同じ元型であっても地域性や時代性の影響を受けて特徴的なイメージに変形する。

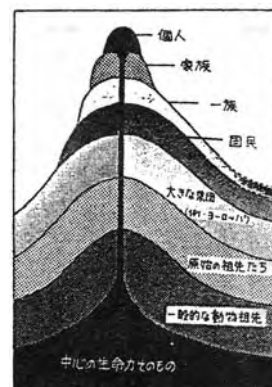
その構図は下の図^{註10})に示されている通りであるが、私たちの心の層を仮定すれば一番上に個人（自我意識が乗っているだけ）が成り立っているが、総合的な様々



ユングの自我と無意識



ユングの無意識における元型



心的系統をあらわしたもの

な世界が私たちに微妙な影響を与えて、本来は非常に膨大な世界が無限に存在すると考えられている。そしてひとつの人格が形成されているわけで、それを単純に個性と言い得るのか、否か。したがってその構図は個々人にも当てはまる故、同じ元型であっても個々人の「心の特徴」の影響を受けて特徴的なイメージとなる。「心の特徴」とは「性格」のことで、古代ギリシア語では「すり込まれたもの」を意味した。これは深層に先天的なものとして在って永久に変わることはない。それに対し「人格」は「ペルソナ（仮面）」を意味し、意識層に在って後天的に変化する。つまり<人格>とは、超自我の影響などを受けながら社会生活を送る上で必要なものを悟性的に身に付けながら変化するものらしい。しかし性格は自分本来のものとして、ありのままに居続けるのだ。

その様な観点から現代社会を顧みるならば、<仮面の自分>と<本来の自分>との距離がますます広がってゆく現代社会で我々は「人格（意識）の物語」と「性格（深層）の物語」をいかに共存させてゆかねばならぬのか、という課題につきあたる。ユングが昔話を重視し研究していたのは、その昔話に元型的なものが表象（表現）されているからである。

つまり昔話と現代人の心象は強く結びついているが故にユングは現代人の深層へ侵入する手段としたのである。そして、昔話が内在する元型的なものがクライエントの投影するイメージの理解に役に立つがゆえに、昔話を今の物語として捉えようとしたのがユング派の心理学であり、その概念を日本に流布させたのが河合隼雄氏である。そして河合隼雄氏の言葉をかりるならば、心的過程が表出されたものが<物語>であり、その物語が普遍性を持ち、時代を超えて伝承されたものが<昔話>である。言い換えれば自我が自己を語ったものが<物語>であり、時代や文化の波に洗われて残った中核部分が<昔話>なのである。

したがって以上の考察をまとめるならば、<夢>は「物語」と「昔話」の両要素を兼ねているものであり、次の4点を掲げることができよう。

- 1、無意識の世界であるゆえ、時間配列がない。
- 2、時間配列がないゆえ昔話の特徴と相似している。（場所、時間、人が不明瞭である）
- 3、夢という世界における夢物語になり得る。
- 4、夢をみることによって日常から非日常へ移行し、そこで出会う様々な体験はファンタジック的要素をもつ。

ここで重要視したいのは、無意識の世界である夢と

いう非日常の世界を作品化した場合、このような特徴が作品内部の深層部とどう関係するかである。

以下、作品「第一夜」の深層部分を解明してゆきたい。

3. 「第一夜」における「時」とは何か —時間を表すシンボリックな表現について

まず「第一夜」の作品世界に注目する。「こんな夢を見た。」で始まる夢の中で、女は死に臨んで「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」と百年後の再会を約束した。そして女は死ぬ。「自分」は百年待つあいだ、「赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越していった。それでも百年がまだ来ない。」と感じる。そして遂に女は「百合」となって生まれ変わったのである。「第一夜」の女の死は、意識の側からみれば理不尽そのものの「死」である。しかしここは無意識界であることを忘れてはならない。自然のルールからみれば「JUST—SO」なのであるが、「第一夜」のなかに動かし難い事実としてそのまま描かれている。しかしいつも生は死と背中合わせの生であり、死に直結した生なのである。それを普遍的無意識界において我々に思い至らせるのである。

「第一夜」の女の死はいわゆる<死と再生>、一繰り返される<とき>の流れであり、回帰的時間として描かれている。こうして<作品世界>の「時」は坦々と流れてゆく。しかしながら<自分>はどうか。夢という無意識界に生きているゆえ「時」は止まっているのではないか。もはや<アウグスティヌス>の<アポリア>同様なものではあるまいか。それはまさに、・・・過去が<もはやないもの>であり、未来が<いまだないもの>とすれば<ない>と<ない>の間になぜ<今>が事実として存在し得るのか・・・という概念を意味する。夢の最後「百年はもう来ていたんだ」とはじめて気づくまで百年という「時」を意識することはない。<もはやないもの>と<いまだないもの>の接点に、<いま>というものがあるとすれば、それは単なる通過点なのか。あるいは一点として存在しえているのだろうか。私はここに一種の矛盾を感じるのである。

江藤淳氏^{註11)}は

つまり、日常的な普通の小説のプロットに要求されるようなものではない

プロットを立てることによって、言いたいことを言う。その言いたいことは、小説的というよりもむしろ詩的な感じで表現する。

と指摘している。

*つまり＜作品世界＞は現実の時間に沿った表現になっているのに対して、＜自分＞の方は、時間は流れずむしろ凍結したような現実を超えた幻想の世界がそこに現われている。＜自分＞の、女を待つ心が独特の意識の流れを作り上げ、時間を停止させたのと同じような状態のまますべてが滞っているのだ。

もしここで、ことばの置き換えが許されるならば、上記の文章を、＜自分＞を＜無意識＞に、＜作品世界＞を＜意識＞に当てはめて考えると次のようになる。深層がより明白になるのではないか。

*＜意識＞は現実の時間に沿った表現となっているのに対して＜無意識＞の方は、時間は流れずむしろ凍結したような現実を超えた幻想の世界がそこに現われている。＜無意識＞の、女を待つ心が独特の意識の流れを作り上げ、時間を停止させたのと同じような状態のまますべてが滞っている。

これは時間よりも空間の構造であって、この二つの流れは、意識と無意識が作り上げた空間である。その空間を充たすものは、「月の光」と「真珠」と「滴る露」であった。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑らかな緑の鋭い貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂いもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそっと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。(中略)自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花卉に接吻した。

「第一夜」

一人残された孤独の中で＜自分＞は月と共に時を過ごす。月と同一になる時間である。この空間を充たす月は、創造的な女性の性の重要なシンボルである真珠にも関連があり、真珠のシンボルは水や女性のシンボルとも結びついている。だから露が本質的に生命を与える恩寵である様に＜月、水、女性＞の一对のシンボリズムの魔力は全て真珠に由来するようである^{註12)}。この繰り返す回帰性に、現実を超えた幻想の世界がたち現われる。そして月は変わらず、その満ち欠けによって死して復活する永遠の生命を得た存在であることを＜自分＞は感じるのである。しかし＜自分＞は、「今、ここに」という時間性が欠如しているのでそこ

には物語のような空間が作り出される。この閉じられたような詩的空間の中で、月は過去への幻想をかきたて古の物語を呼び起こす。例えば、月の中にうさぎが住んでいるという兎本生物語^{註13)}から今昔物語へ、あるいはまた十五夜に月の都へ帰るといふ竹取物語へと古の物語を次々と呼びさますことも可能であろう。こうした物語時間が月と同一になるのである。漱石自らの俳句^{註14)}にも月は数多く見られるが、実方清、水谷昭夫両氏^{註15)}は

漱石にあって「月」は単純な自然描写ではなく、人間の心や魂に映り、孤独な人間の姿となっていくものである。

と指摘する。物語が物語を育み、その時間意識をこうした空間的なイメージとして転換してゆくところに、夢を舞台としている漱石の文学世界が展開されてゆくのである。

4. 「第一夜」におけるテーゼ

前章においては、時を媒介とした＜自分＞と＜作品世界＞との関係性について述べた。そして＜自分＞を＜無意識＞、＜作品世界＞を＜意識＞として考察した。小説の筆法よりも夢の手法がとられているこの作品において、当然のことながら作家は小説の中に立ち入ることは許されない。しかし、上記に加えてさらに、たとえばもし＜無意識＞を＜漱石のありのままの姿、あるいはありのままの素顔＞と解釈した場合、ここでいう＜意識＞とは＜作家としての漱石、あるいは作家のありかた＞ではなかろうか。つまり、一人の人間の内なる二重性を表わしているのではないかと思うのである。おそらくこの感覚は、本稿最初に掲げた漱石の英詩の「生が夢の中に融け込み 夢がたえまなく 生に蝕まれるのでなければ！」に近似しているものであろう。

水谷昭夫氏^{註16)}の言葉を借りるならば、「V・E・フランクルの比喩にならっていえば、潮の引いたあとに顔を見せる暗礁の位置を、たしかめるということであろう」と指摘する。英詩に登場する女性をいまここで明らかにしようというのではない。ましてや「第一夜」の女性とかさねてみるというわけでもない。本稿の目的は、作家漱石にとっての＜夢そのものの意義＞とは何か、なのである。

したがってこれをそのままユング流に解釈するならば、2章で述べたように＜自分＞は、「性格（深層）

の物語」であり、＜作品世界＞は「人格（意識）の物語」と考えることも可能であろう。

ちなみに、心は意識と無意識より成り、意識の中心を「自我」、意識と無意識を合わせた心の全体の中心を「自己」とユングは仮定した。河合隼雄氏^{註17)}は

我々の心の中に現われるもう一人の私が、自己実現への歩みを促進する自己の像なのか、あるいは私を転落にさそう影の像なのか、見分けることは実際的にはほとんど不可能である」

と指摘する。自我があまりにも一面的になりすぎた時、自己は心の全体性を回復するために影を生ぜしめる。その影は自我を転落に誘う影ではなく、それと誤解された自己であり、その影を自己実現への目的論的に捉えようというのがユング流であった。人間の心の、意識と無意識の二重構造が抱える、複雑さや多重性、仮面と性格という両義性を象徴しているものなのであろうかと思う。したがって、漱石自身の意識と無意識の深層をこの作品『夢十夜』の「第一夜」に置き換えていたと考えることはできないだろうか。この意識と無意識の織り成す世界でこの様に考察することによって、先述したような矛盾は解消するのではないかと思う。そしてまた、漱石自らも「文芸の哲学的基礎^{註18)}」において意識の連続の問題をとりあげて解説していることを忘れてはならない。そこに収斂されてゆく問題を内包する作品は『草枕』であった。『草枕』も『夢十夜』（「第一夜」）同様、筋のない小説として描かれていたため、そこに登場する余なる人物が画家であることに着目し、漱石は意識の「連続」の上に成り立つ時間的關係と意識の謂わば「非連続」の上に成り立つ空間的關係を構築した。筋のないという点においては作品『草枕』も『夢十夜』も酷似するものであるが、『夢十夜』が『草枕』の様な絵画の手法ならぬ夢の手法であるため、連続——非連続に加えて、意識——無意識の二重構造まで及んだところに『夢十夜』の独自の世界がある。

「無意識の闇は、意識の光に照らされるとそこは無意識ではない。意識の一部になる」と河合隼雄氏^{註19)}は指摘するが、

それでは「第一夜」の世界においてその統合が示されるのはどこかという点、「哲学的基礎」風に申せば、あるいは、ユング流に申せば、＜作品世界＞と＜自分＞の交錯する時点、即ち＜今＞であるが、それは「第一夜」の表現にしたがえば

「百年はもうきていたんだな」とこの時はじめて気が付いた。

＜時＞であり、そしてそれと同時に「第一夜」の世界は完結するのである。

5. おわりに

以上の様に考察すると、作品『夢十夜』の世界観は、まさに近代科学によって忘れさられたものを呼び覚ます感がある。すなわちそれは物語の世界であり、お話の世界である。

とかく我々はある現象が起こると因果関係でものごとを対処しようとする。因果律は科学の大前提ではあるが、全てを科学で把握することは出来ない。我々が一番利用している科学的考え方は、これを全て人の＜心＞に適應することは出来ないのである。＜夢＞もそうであった。何が起きるかわからない現象を全て原因と結果でとらえれば問題が起きる。科学で実証できないものはたして何によってある程度認識できるのか、とすれば、ここに発生する独特な物語によって解明されてゆくことになる。したがって、漱石の「文芸の哲学的基礎」がそうであったように、ユングの連続性から非連続性への発見がそうであるように、①時間②空間③因果律の他に上記の＜共時性＞の世界が見い出されることによって、物語でしかみることができない心理学的方法と科学的な方法は相対立するものではなく、この二つの考え方は相互的に機能されることとなるのである。現代を生きる人の問題解決成功へのターニングポイントはここにあるようである。これがまさに、作家漱石の提唱ではなからうか。

註

- 1 漱石全集第23巻「詩歌俳句附印譜」岩波新書版13頁 岩波書店
- 2 桶谷秀昭『夏目漱石論』河出書房新社 昭51・6
- 3 越智治雄『漱石私論』角川書店 昭46・6
- 4 佐々木充『夢十夜』解析8「帯広大谷短期大学紀要」昭45・12
- 5 内田道雄『夢十夜』と「永日小品」「古典と現代」28 古典と現代の会昭43・5
- 6 岩上順一『夢十夜』「漱石入門」中央公論社 昭34・12
- 7 高橋たか子『夢と小説』「現代の眼」現代評論社 昭47・3

- 8 夢の構造図は河合隼雄「ユング心理学入門」より抜粋
- 9 「深層心理学なるほど講座」より抜粋 日本実業出版社
- 10 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 昭和42・10
- 11 江藤淳「漱石の想像力」平5・7
- 12 世界シンボル大辞典 大修館書店 平8・12
- 13 <月>の中に兎が住んでいるという物語はインドの「未曾有経」が源である。仏教の守護神帝釈天は、下界のものたちに慈悲の道を教えるために姿を変え、老婆となって諸国を巡り歩いた。空腹のため今にも倒れんばかりであった時、そこに通りかかった動物のカワウソ、ヤマメ、サルたちは老婆を哀れに思い、カワウソは魚、ヤマメはトカゲ、サルは木の実を携えてきたが何もできない兎は、自らの身体を老婆に与えようと燃え盛る火の中に飛び込んだその瞬間、老婆は帝釈天の姿に戻り兎を救い、真の慈悲を表すものとして兎の徳を讃え世に示すべく、兎を月に住まわせたという。これは日本にも影響を与え『今昔物語』に伝えられた。
- 14 漱石の俳句（月に関するもの）
- * 明治24年 吾恋は闇夜に似たる月夜かな
柿の葉や一つ一つに月の影
今日よりは誰に見立ん秋の月
 - * 明治25年 鳴くならば満月になけほととぎす
 - * 明治28年 見ゆる限り月の下なり海と山
酒に女御意に召さずば花に月
 - * 明治29年 配所には千網多し春の月
口惜しや男と生れ春の月
 - * 明治30年 真夜中は淋しかろうに御月様
これ見よと云はぬ許りに月が出る
 - * 明治32年 梅の詩を得たりと叩く月の門
梅の宿残月硯を蔵しけり
 - * 明治37年 罪もうれし二人にかかる朧月
Lady, by yonder blessed moon I swear,
That tips with silver all these fruit—tree
tops.
- Romeo and Juliwt Act,11,Sc,11.
夏の月眉を照らして道遠し
正一位、女に化けて朧月
(御曹子女に化けて朧月)
海棠の精が出てくる月夜かな
- * 明治39年 山門や月に立つたる鹿の角
暁や消ぬべき月に鹿あはれ
 - * 明治40年 鞭鳴らす頭の上や星月夜
 - * 明治42年 鶏頭に後れず或夜月の雁
 - * 明治43年 暁や夢のこなたに淡き月
ただ一羽来る夜ありけり月の雁
 - * 明治44年 抱一のすすきに月の円かなる
 - * 明治45年・大正元年 巖かに松明振り行くや星月夜
 - * 大正2年 四五本の竹をあつめて月夜哉
萩の粥月待つ庵となりけり
 - * 大正5年 萩としだに賛書く月の團居哉
 - * 年月不詳 月ななめたけのこたけになりけり
 - * (漱石の月に関する俳句は総数54句であるが、本稿においては枚数の都合上、29作品挙げています。)
- 15 実方清・水谷昭夫「夏目漱石辞典」清水弘文堂 昭47・4
- 16 水谷昭夫『漱石文芸の世界』桜風社 昭48・11
- 17 河合隼雄『昔話の深層』福音館書店 昭52・10
- 18 夏目漱石『文芸の哲学的基礎』漱石全集 第20巻 岩波書店
- 19 河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店 昭57

参考文献

- 秋山さと子 ユングの心理学 講談社新書
河合隼雄 影の現象学 講談社学術文庫 昭53・12
河合隼雄 心の処方箋 新潮社 平4・1
河合隼雄 対話する人間 潮出版 平4・6

Soseki "Ten night dream", - Thing - to suggest of "the first night"

Yumi Toda

<Abstract>

What will a dream? A new trial of Soseki for the story form called "the dream praying to Buddha for ten days and nights" is indicated with technique called the dream here. This work was able to complete the world of the fantasy of the space wonderfully in time when the stage called <dream> illuminated it in a unique stream of consciousness and the interval of the unconscious layer. And it thinks that I may symbolize complexity and the multiplex nature, a mask and an ambiguity of the character which the consciousness of the human heart and unconscious dual structure have. And what is the world going to propose to us? I intend to discuss a thing to suggest of "the first night".

Key words: consideration, unconsciousness, a dream, time space, the first night